

新潟平野の古墳と集落

—GISを用いた遺跡分布の基礎的検討—

小野本 敦

はじめに

古墳時代の社会がどのような単位で構成されていたのかという問いは、地域研究の出発点である。この問題に対するアプローチとしては、地形的な障壁に基づく区分や、古代の郡・郷などの範囲から遡及する方法がとられることが多いが、確定的なものではなく、論者の歴史観や解釈に委ねられる部分も少なくない。本稿では、GISを利用して新潟平野における古墳と集落の分布を定量的に分析し、議論の土台となる地域単位の描出を試みる。

1 目的と方法

新潟平野における古墳時代研究は、1980年代以降の古墳の発掘調査事例の蓄積や、1993年の「新潟シンポ」[日本考古学協会新潟大会実行委員会1993]を経て、2000年代前半までに特に古墳時代前期に関して大きく前進した。古墳の分布を基にした地域社会論は甘粕健が先鞭をつけ[甘粕1986・1993a・1993b・1994]、鶴巻康志[1993]は信濃川右岸の新津丘陵から東山丘陵（以下、本稿で用いる地形・地名は第1図による）にかけてほぼ10kmおきに古墳が存在することを指摘した。川村浩司や広井造は、信濃川両岸の古墳の墳形の相違を指摘し、その歴史的背景を論じた[川村1992・2000、広井1996・2005]。

これらはいずれも発掘・測量・踏査等の調査成果を踏まえた実証的で手堅い研究であるが、古墳の分布に基づく地域論の方法論的な限界として、古墳が存在しない（あるいは未発見・未調査の）地域を捕捉しにくい点が挙げられる。このことは、2012年に城の山古墳が発掘調査され前期古墳と確定するまで、新潟平野における古墳時代研究が阿賀野川以南を中心に議論されてきた点に端的に現れている。もちろん、城の山古墳の存在や阿賀野川以北（以下、阿賀北）の古墳文化に注目する見解は早くから示されていたし[阿部1989・坂井1989など]、上述の諸研究でもその点に言及してはいるものの、古墳の存在を議論の出発点とする限り、信濃川両岸と阿賀北を同じ次元で検討することは困難であった。いまでも多くの古墳が未調査であり、新発見・新知見が相次いでいる新潟平野においては、古墳の分布とは別の観点から地域社会を把握する必要性が高いと考える。

また、各古墳の年代観などの基本情報はおおむね共有されているが、古墳の周囲に広がる空間を首長の領域としてグルーピングする方法は様々であり、またその空間の定義も研究者によって微妙なズレがあるように思われる⁽¹⁾。もちろん意見の相違があること自体は問題とすべき点ではないが、地域区分の明確な基準が存在しないことが議論の深化を阻んでいると言える。

以上の問題意識から、本稿では、地域単位の描出にあたって、①：古墳の不在を補完する評価軸を導入し、それを②：間主観的（inter-subjective）で手続き的再現性を持つ手法によって提示することを目標に設定する。そして、作成した分布図を基に若干の試論を展開する。なお、本稿で使用する地域単位という用語に関しては、古墳被葬者と一般集落構成員による最も基礎的な階層関係が成立する空間と定義しておく。

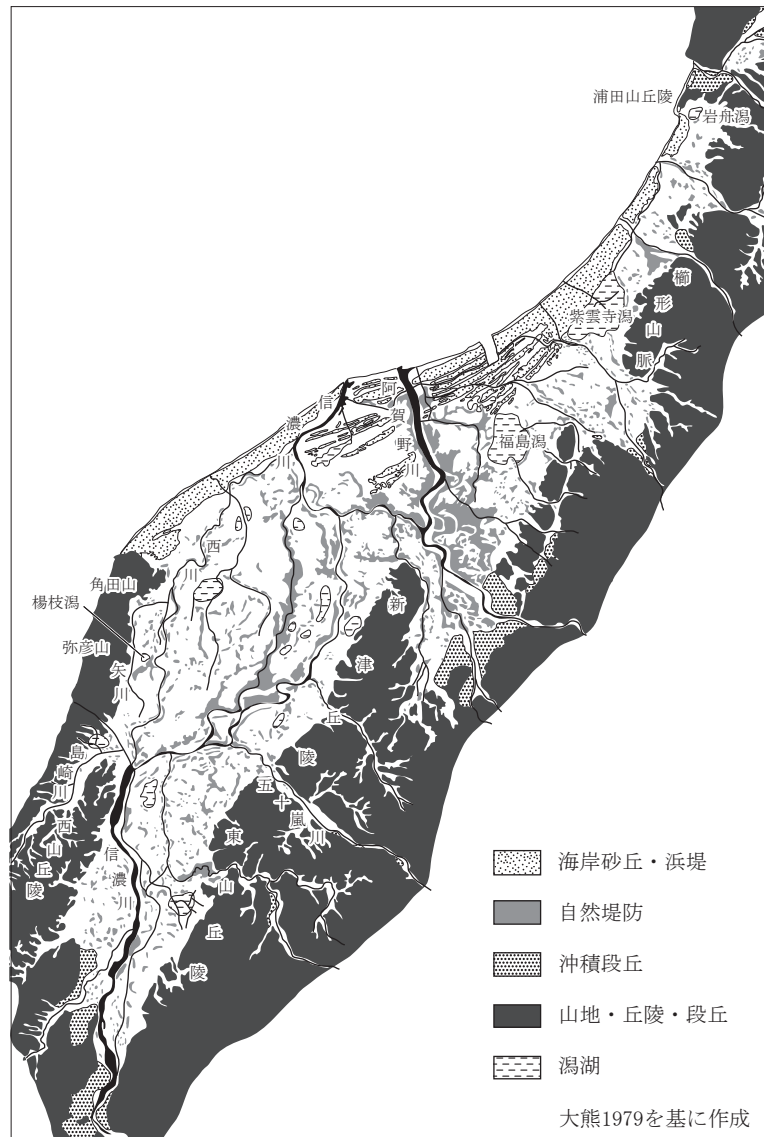
古墳の不在を補完する評価軸としては、同時代の遺跡分布を充てる。古墳時代の集落研究では、例えば

発掘調査された大規模集落や生産遺跡を近傍の古墳被葬者と関連付けて論じるといったように、遺跡を定性的なデータとして用いることが多い。しかし、発掘調査によって実態が明らかな遺跡は限られており、地域単位の空間的属性を検討するには不十分である。そこで、本稿ではひとまず個々の遺跡の「質」をあえて捨象し、位置情報を持つ等価な存在として定量的に扱う。そのうえで、古墳の「ちらばり」と対応する遺跡の「まとまり」を把握して地域単位を指定する。分析に用いるデータは、2015年度末時点での「新潟県遺跡地図」に登録された古墳時代の遺跡（いわゆる「周知の遺跡」）を、自治体史などで若干補正した246遺跡である⁽²⁾。なお、以下では「遺跡」を人間活動の場という広い意味で「集落」と呼ぶことがある。

集落の「まとまり」を把握する方法として、GISを用いて遺

跡1地点ごとに一定の半径内に存在する他の遺跡の分布密度を計算し、その多寡を色調の濃淡で表現する⁽³⁾。この方法では、分布の「広がり」と「厚み」が同時に可視化でき、かつ出力値が各地点からの探索半径のみに依存する点で、再現性が担保される。また、分布密度の濃淡は、現に知られている遺跡だけでなく、未知の遺跡の存在可能性をも表現している[津村2006]。このことは、常に未知の遺跡への配慮が必要な考古学の分布論において大きな利点であり、作成される分布図は今後の資料の増加をある程度予測したものとなることが期待できる。

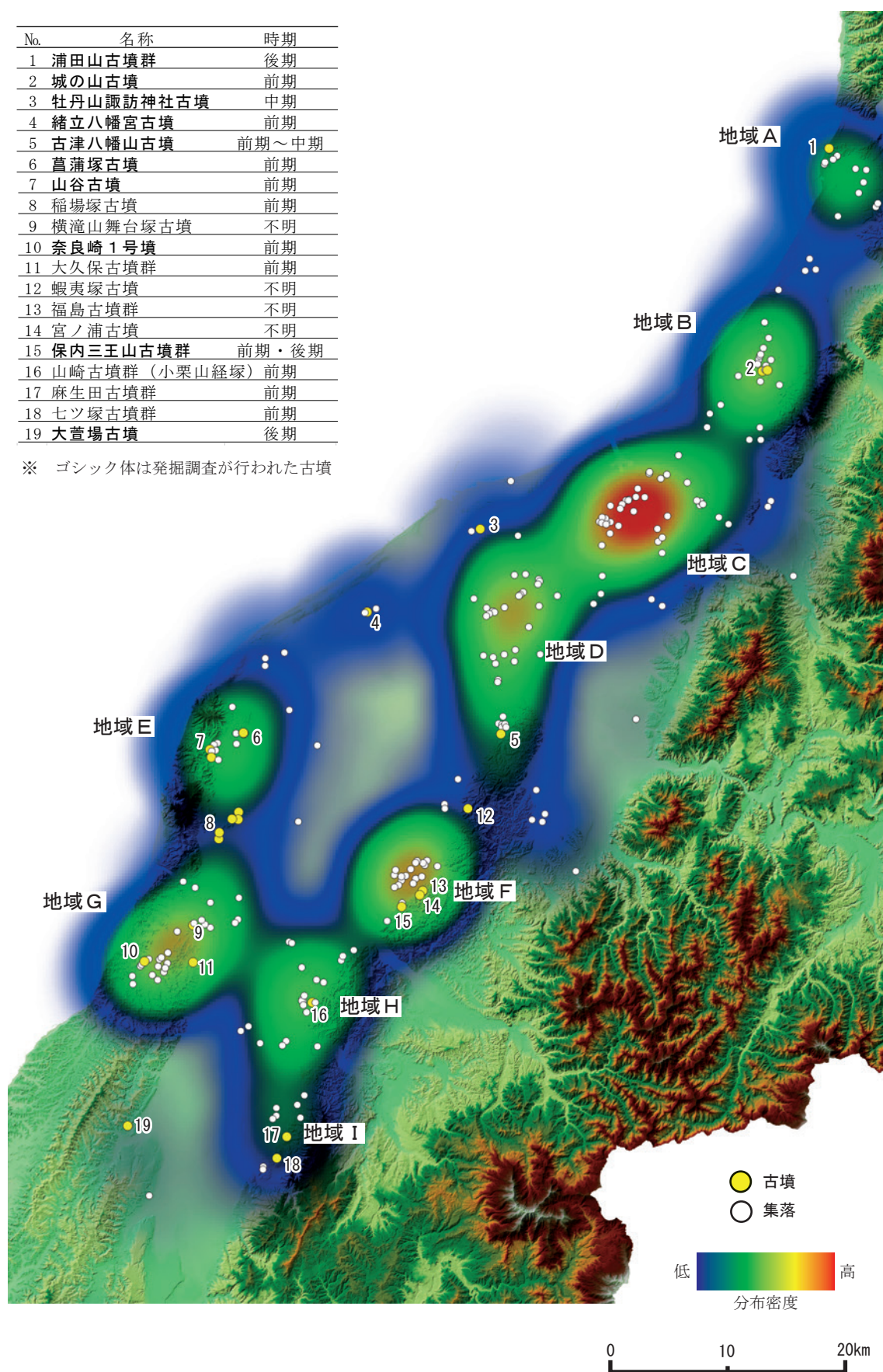
分布密度の描出において重要なことは、各遺跡からの探索半径の設定である。例えば、これを大きくすれば新潟平野全体が一つの範囲で括られることになるし、極小化すれば一遺跡一分布範囲の呈をなす。これはいずれかが誤りというわけではなく、分析の視点に応じた値を選択する必要がある⁽⁴⁾。本稿の目的からすれば、上述のように古墳の「ちらばり」と集落の「まとまり」がうまく対応する値を探せばよいわけであり、結果的には、探索半径を8 km（無論この数値自体は特に意味を持たない）に設定したとき、最も高い相関を示した（第2図）。



第1図 新潟平野の地形名称

No.	名称	時期
1	浦田山古墳群	後期
2	城の山古墳	前期
3	牡丹山諏訪神社古墳	中期
4	緒立八幡宮古墳	前期
5	古津八幡山古墳	前期～中期
6	菖蒲塚古墳	前期
7	山谷古墳	前期
8	稲場塚古墳	前期
9	横滝山舞台塚古墳	不明
10	奈良崎 1 号墳	前期
11	大久保古墳群	前期
12	蝦夷塚古墳	不明
13	福島古墳群	不明
14	宮ノ浦古墳	不明
15	保内三王山古墳群	前期・後期
16	山崎古墳群（小栗山経塚）	前期
17	麻生田古墳群	前期
18	七ツ塚古墳群	前期
19	大萱場古墳	後期

※ ゴシック体は発掘調査が行われた古墳



第 2 図 新潟平野の遺跡分布（古墳時代）

2 古墳時代における新潟平野の地域単位

(1) 地域単位の概要

第2図に示した遺跡分布のまとまりを、便宜的に地域A～Iと呼び、各地域の地理的特徴と所在する古墳を概観する。

地域Aは岩舟潟を取り巻くように展開し、日本海に面した浦田山丘陵に古墳時代後期の浦田山1・2号墳が立地する。

地域Bは海岸砂丘と楕形山脈にはさまれた沖積平野に展開し、そのほぼ中央に城の山古墳が立地する。2012年に埋葬施設が発掘調査された城の山古墳からは、新潟平野の前期古墳で最も豊富な副葬品が検出された〔水澤ほか2016〕。

鳥見潟・福島潟などを取り込むように展開する地域Cは、集落の分布密度が最も高い地域であるが、弥生時代の周溝墓はいくつか存在するものの古墳は未発見である。

地域Dは新津丘陵先端から日本海沿岸まで南北に長い形状を呈し、その両端に古津八幡山古墳と牡丹山諏訪神社古墳が立地する。なお、地域Fとの間に蝦夷塚古墳が存在するが、未調査であり集落との対応も明瞭ではない。

地域Eは角田山麓に展開し、前期古墳の菖蒲塚古墳・山谷古墳などが点在する。稲場塚古墳の周囲は集落が未発見のため分布範囲からやや外れた位置にあるが、これは弥彦村域での調査が少ない点も影響していると思われるので、ひとまず地域Eに含める。稲場塚古墳が載る独立丘陵は、他にも遺跡地図に数基の古墳が掲載されており、実態は未詳ながら横穴式石室を持つ後期古墳と考えられる。

地域Gは、島崎川の流域に、大久保古墳群・奈良崎1号墳・横滝山舞台塚古墳などが立地する。奈良崎1号墳を除き発掘調査は及んでいない。地域EとGは、域内に複数の古墳が点在することが他地域と異なる共通点として指摘できる。こうした状況が、同一系譜の首長によるものか、あるいは地域内に複数の首長が並立していたことを示すのかは、次節で検討する。

地域F・H・Iは新津丘陵～東山丘陵沿いに分布し、丘陵上に古墳、平野部に集落が営まれる。地域Fには、発掘調査によって前期の前方後方墳・前方後円墳・造り出し付き円墳と後期の円墳の存在が確認された保内三王山古墳群と〔新潟大学考古学研究室1989〕、未調査の宮ノ浦古墳・福島古墳群がある。地域Hの山崎古墳群は後期の古墳群であるが、隣接する丘陵上の小栗山経塚では底部に穿孔のある壺形土器が出土し、前期古墳の存在が指摘されている〔金子1991〕⁽⁵⁾。地域Fと地域Hは五十嵐川によって隔てられ、現在用いられる「嵐北」「嵐南」という地域区分に対応する。一方、地域Hと地域Iの境は不明瞭だが、地域Iにも対応する古墳（麻生田古墳群・セツ塚古墳群）が存在することから独立した地域単位とした。調査が進めば分布域はより明瞭になると思われる。古墳はいずれも未調査であるが、麻生田1号墳は墳形の特徴から前期古墳の可能性が指摘される〔小野ほか1991〕。

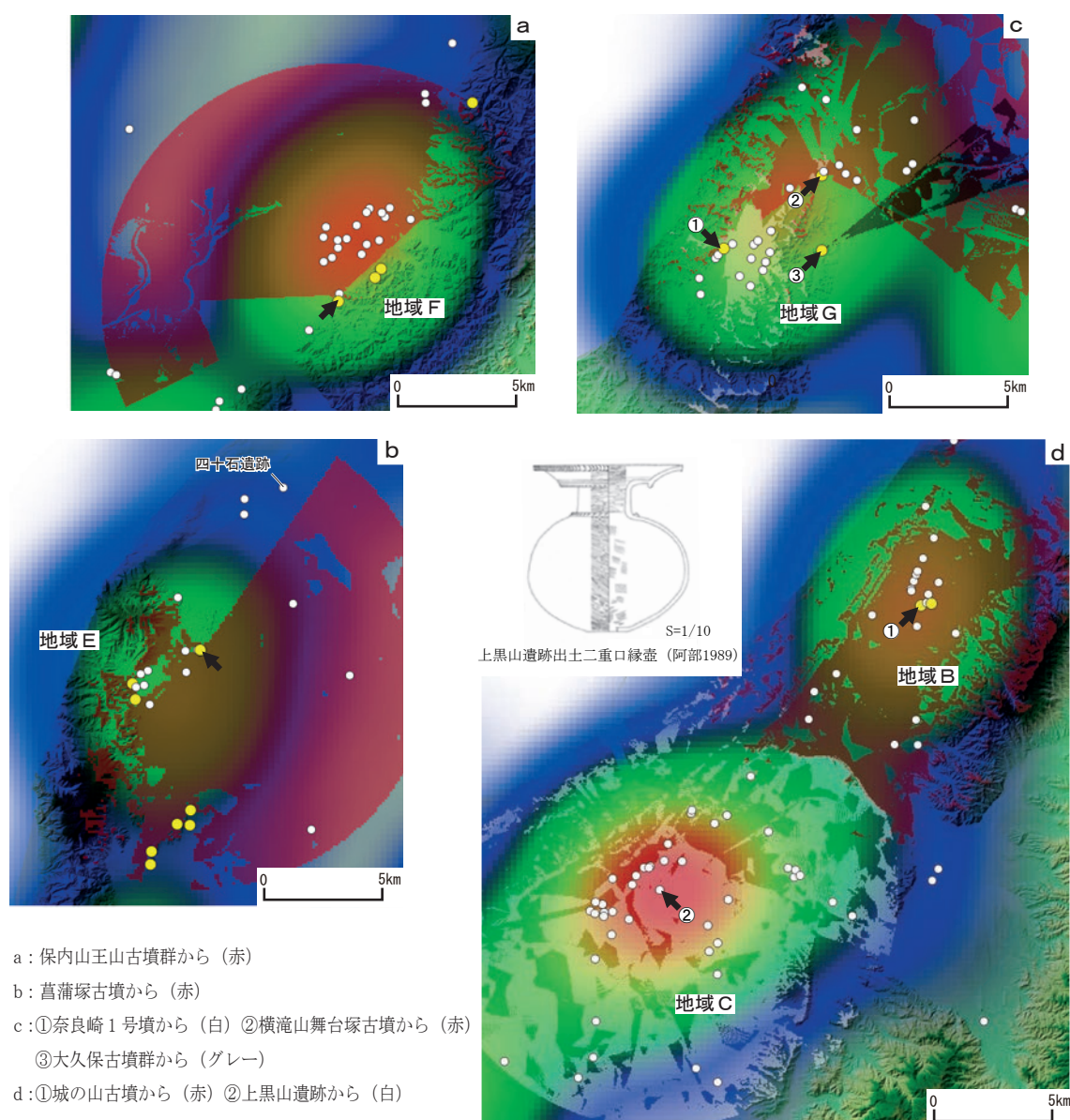
日本海沿岸の緒立八幡宮古墳の周囲には、顕著な集落のまとまりが確認できない。これは周辺の地表面が3m近く沈降していて発見されていないためと考えられるが〔相田2015〕、現状では評価が難しく、本稿では検討対象としない。

(2) 古墳からの眺望と集落

古墳時代の集落分布と古墳の立地は、以上のようにかなりの程度相関する。「古墳は地域社会を象徴する構築物である」という古墳時代研究の前提であり、しかし必ずしも厳密な検証を経ないまま使用されが

ちな言説の妥当性は、集落分布の定量的検討によって傍証しうることをまずは確認しておく。ただし、ここまでの作業は、機械的に算出したものに過ぎないとも言える。そこで本節では、異なる観点からの分析を重ねることで、第2図が示す地域単位の歴史の実体としての妥当性を検証する。

古墳が集落からの眺望を意識して造営されたことは、古墳時代研究における共通認識といえる〔寺村2014：97-100頁〕。近年ではGISの可視範囲分析を利用した古墳間および古墳と集落の視認関係の検討が成果を上げている〔寺村2014など〕。新潟県では、これとはやや異なる切り口ながら、古墳の「正面観」を集落からの視認性の点から理解しようとした川村浩司〔1992〕の先駆的な研究がある。しかし、広井造〔1999〕が指摘したように、実際の集落分布との関係は未検討であった。以下では、比較的事例の多い前期古墳を含む地域における古墳と集落の視認関係を分析・比較する⁽⁶⁾。なお、第3図には古墳からの可視領域を赤・白・グレーの網掛けによって示しているが、これはその範囲から古墳を視認できることと同義とみなす。



第3図 前期古墳からの可視領域

丘陵部の古墳と可視領域 新津丘陵～東山丘陵沿いの地域F・H・Iでは、山麓に位置する古墳から平野側の集落をカバーするように扇形の可視領域が広がる。代表例として地域Fの保内三王山古墳群からの可視領域を第3図aに示す。

古墳が点在する地域 第3図bは、地域Eの菖蒲塚古墳からの可視領域である。菖蒲塚古墳から最も遠い稲場塚古墳が立地する独立丘陵は明瞭に視認でき、その他の古墳や集落との視認関係も良好である。川村浩司〔2000〕は地域Eに点在する古墳を「矢川流域の古墳群」と定義したが、これらの古墳の親縁性は相互の視認関係からも首肯される。

その矢川は、稲場塚古墳の付近に存在した潟湖（楊枝潟）を經由し、菖蒲塚古墳が載る丘陵の直下から域外へ流下し、信濃川（西川）と合流して日本海へ注いでいた（第1図）。地域Eからやや川を下った位置にある四十石遺跡（第3図b）では、新潟平野で最多の布留式甕が出土し、また古代の資料ではあるが「津」と墨書された土器もみられることから〔新潟市教育委員会2012〕、日本海と地域Eを結ぶ中継点、すなわち後世の「津」としての位置付けが可能と考える。また、菖蒲塚古墳に隣接する南赤坂遺跡や、山谷古墳に隣接する御井戸遺跡からは、古墳時代前期並行の続縄文土器が出土し、前者では在地の土師器との折衷土器も生み出されるなど〔巻町教育委員会2002〕、一定深度の交流が推測できる。これら外来系土器に象徴される地域Eと遠隔地との交流は矢川を介して行われた可能性が高く、菖蒲塚古墳の存在は矢川を往来する人々の視覚に強く印象付けられたと思われる。すなわち、新潟平野最大の前方後円墳である菖蒲塚古墳は、内から（地域Eの古墳・集落）と外から（矢川水運）の「視点」が交差する象徴的な位置に造営されたと理解できる。

一方、地域Gでは、奈良崎1号墳と横滝山舞台塚古墳の可視領域はほとんど重ならず、集落はいずれかの古墳のみを視認できる位置に立地する（第3図c）。横滝山舞台塚古墳の築造時期が不明であるものの、島崎川の上流側と下流側の古墳間に視認関係が成立しない点は重要である。上述した地域Eと対照的なあり方から、地域Gは他の地域単位よりも小さな二つのグループで構成されと考えられる。このことは、方法論は異なるが春日真実〔2002〕の地域区分案と結論において近似する。ただ、春日が大久保古墳群を島崎川下流のグループに含めるのに対し、本稿の分析からは、第3図cにグレーの網掛けで示した大久保古墳群から可視領域が極端に狭く、地域Gと重ならないことから、他の古墳とは区別される可能性も指摘できる。

沖積地の古墳と可視領域 沖積地に立地する城の山古墳は、周囲と墳頂との比高差が約5mあり、全方位に眺望が開けているため、地域Bの集落が隈なく視界に収まる（第3図d）。上述した新津丘陵沿いのエリアとは異なる形状の可視領域を形成しており、より「見せる」意識の高い立地と理解できる。

同じく沖積地に展開する地域Cでは古墳は未確認であるが、新潟平野で最も高い集落の分布密度は、古墳の存在を強く示唆している。実は、地域Cには古墳の可能性が推測される遺跡がいくつか存在し、中でも、赤彩された二重口縁壺などが出土した上黒山遺跡〔阿部1989〕は、砂丘列上の小高い砂山を削平した際に出土したというエピソードも勘案するとその有力候補に挙げられる⁽⁷⁾。上黒山遺跡は地域Cの中央に立地し、可視領域に地域内の集落が収まる（第3図d）。すなわち、地域Cにおける上黒山遺跡の位置は、地域Bにおける城の山古墳に酷似することが指摘できる。この点からも上黒山遺跡の周辺に古墳が存在した蓋然性は高いと考えられ、今後の調査の進展が期待される。

これまで、古墳が未発見の地域Cが一個の地域単位として積極的に評価されることはあまりなかったが、集落の分布密度をベースに考察することで、古墳の存在を合理的に（経験的にではなく）推定するこ

とができる。地域Cは集落の分布密度の高さに加え、内水面交通の拠点となる潟湖を擁する点、地域Eと並んで古墳時代前期並行の続縄文土器の出土が多い点〔滝沢2014〕などから、古墳時代前期の新潟平野において重要な意味を持つ地域と考える。

以上のように、前期古墳からの可視領域は、集落の分布密度から描出した地域単位と相関性が高く、前期古墳の立地と集落の展開には有機的な関連が想定できる。また、このことを応用すると、古墳からの可視領域と集落の分布密度が一致しない場合の地域構造の解釈や、未知の古墳の存在を推定する手法としても有効であることを示した。なお、古墳時代後期には、浦田山古墳群（地域A）や大萱場古墳のように、集落との視認関係を持たない古墳が出現する。視認関係の変化には、前期と後期での古墳築造理念の違いが反映している可能性もある。

3 遺跡分布からみた地域動態

（1）古墳出現期の動向

次に、弥生時代の集落分布との比較を通して、各地域単位の成立過程を把握する。

第4図に、第2図と同様の手法で作成した弥生時代の遺跡分布を示した。遺跡数は205で、墳墓を除く古墳時代の遺跡数に近い。これによると、弥生時代に最も高い集落の分布密度を示す範囲は、古墳時代の地域Gとほぼ一致する。島崎川の上流側と下流側に集落分布が分かれる傾向も古墳時代と同様であることから、前章で指摘した古墳時代の地域Gの構造は、弥生時代から継承されたものと考えられる。すなわち、地域Gは集落の分布密度が高い反面、古墳出現期の変化が乏しく、小規模な集団が並立する状況が継続する地域でもあると言える。

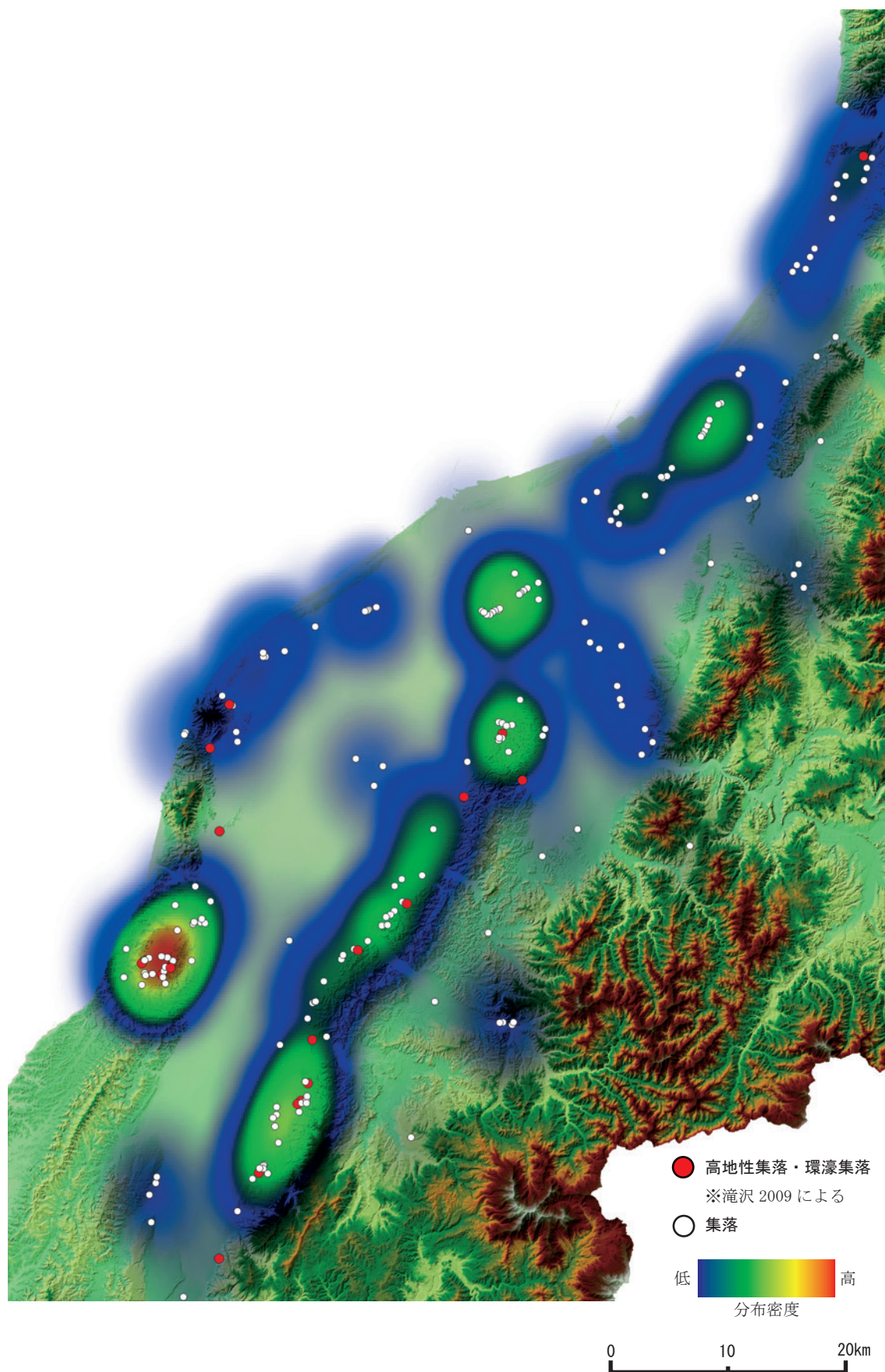
新津丘陵～東山丘陵においては、丘陵裾沿いに帯状に集落が分布する。明確な分布の中心が認められないのは、古墳時代よりも小さな範囲で集落のまとまりが形成されたためである。この状況が、古墳を核として地域F・H・Iに凝集することで古墳時代の地域単位が成立することが理解できる。なお、古墳時代に地域Dの一部となる新津丘陵先端が、弥生時代の段階から独立した分布域を形成している点にも注目しておきたい（後述）。

阿賀北では、集落の分布は古墳時代と比べ分散的である。集落が最も集中する範囲は、地域B・Cの間あたりにあって古墳時代と一致しない。また、高地性集落・環濠集落の分布をみると、信濃川の両岸では古墳の出現地とおおむね対応するのに対し〔甘粕1993b〕、阿賀北では地域B・Cを飛び越えた平野の最北端に山元遺跡が存在する。こうした様相は、阿賀野川を境に古墳出現の経緯に相違があったことを示唆する。

（2）画期としての古津八幡山古墳

古津八幡山古墳は、新津丘陵の先端に築造された墳丘長60mを超える新潟平野最大の円墳である。築造時期は前期とされてきたが、調査の結果、墳丘構築方法の特徴等から前期末ないし中期初頭と改められた〔新潟市教育委員会2014〕。埋葬施設が確認されず出土遺物も少ないため詳細な時期比定は難しいが、新潟平野の前期の首長墳より後出するという点に関しては異論が少ない。以下に記す周辺集落の様相からも、古津八幡山古墳の出現は新しい時代を象徴する事象と解釈するのが妥当である⁽⁸⁾。

古津八幡山古墳を含む地域Dは、新津丘陵から日本海沿岸に達する南北に長い形状を呈する。古墳の立地に依拠した従来の研究では、古津八幡山古墳を信濃川右岸の勢力と定義してきたが、集落展開の様相は



第 4 図 新潟平野の遺跡分布（弥生時代）

それ以外の信濃川右岸の地域単位と明らかに異質である。上述のように、弥生時代には新津丘陵先端部と日本海側の砂丘地にそれぞれ孤立的に集落分布のピークが存在することから、両地域が結びつくのは古墳時代における集落動態の結果であることが理解される。

発掘調査事例によれば、地域Dの集落には中期以降に盛行するものが多い（沖ノ羽遺跡・結七島遺跡・中田遺跡・日水遺跡・塩辛遺跡など）。また、古津八幡山古墳の周辺に位置し、首長の拠点集落の可能性が指摘される舟戸遺跡も、中期以降の土器が主体を占める〔新津市教育委員会1995〕。こうした点から、地域Dの生成に向かう集落動態が活発化するのには中期以降の可能性が高い。

一方、地域Dの北端である阿賀野川・信濃川河口付近には、中期前半に牡丹山諏訪神社古墳が出現する。直近では同時期の集落の発見が少ないが、これは緒立八幡宮古墳周辺と同様、地盤の沈降も考慮する必要がある。牡丹山諏訪神社古墳から出土した新潟県下で初例となる円筒埴輪は、外面調整にB b種ヨコハケを採用し、口縁部に突帯を施す特徴から誉田御廟山古墳段階に位置付けられ、東国での類例が少ない点から、畿内からの工人の派遣も想定される〔橋本2015〕。なお、原料の粘土は新津丘陵の地層から採取された可能性があり〔藤根・米田2015〕、新津丘陵と日本海沿岸の結びつきを示唆する。

以上のような集落動態と、時を同じくする古墳の築造が無関係とは考えにくい。若狭徹は、前期古墳の築造停止後に出現する古津八幡山古墳は新潟平野における「共立王」の墓であり、信濃川と阿賀野川の合流地点に近い交通上の象徴的な地点に築造されたとした。また、古津八幡山古墳の出現の背景として、倭王権の直接的な関与だけでなく、東山道ルートを超えて日本海の交易拠点（港）の確保を目指す上毛野をはじめとする関東地方の勢力との関係を考慮する必要性を示唆した〔若狭2013〕。地域Dが新津丘陵と日本海沿岸を結ぶように展開し、その両端に古墳が出現するという状況は、こうした理解と符合する点が多く、その背景について俯瞰的な検討が求められる。

おわりに

本稿で目指したのは、「客観的」で唯一絶対の地域区分ではない。そうではなくて、所与のデータに対し手続きを明示しながら検討を加えることで、誰もが共有（または反論）できる議論の基盤を作ることに関心を置いた。結果的には先行研究の成果を大きく超えない部分が多いが、定量的な分析によって地図上に「見える化」できたことは一定の成果であるし、それによって今まであまり注意されてこなかった新たな論点もいくつか提示できた。ただし、今回の分析では集落の時期的な検討が不十分であることから、各地域単位の動態をきめ細かく把握していくことを今後の課題としたい。

なお、本稿は2016年9月24日の新潟考古学談話会での発表を骨子としている。拙い内容に対し有意義なご指摘を下された参加者各位に感謝いたします。

追記 脱稿直前に『城の山古墳発掘調査報告書』が胎内市教育委員会より刊行された。本稿ではその成果を十分に生かすことはできなかったが、古墳時代前期における阿賀北（地域B・C）の重要性・特異性は強調しておいたつもりである。今後、新潟平野の古墳時代をめぐる議論が新たな局面を迎えることは必定であり、本稿には遺跡分布から見たその予備的検討という位置付けも与えておきたい。

注

（1）例えば、新津丘陵から東山丘陵までを一つの「政治領域」とみる広井〔1996〕や川村〔2000〕に対し、春日真実

- [2002] はより小さな集団を複数想定する。広井 [2005: 47頁] では自説に対する異論を紹介しているが、見解の止揚は図られていない。私見では、これらの地域区分案は必ずしも対立的ではなく、重層的に構成される地域社会の異なる位相を評価したものとみる。
- (2) 個々の古墳が遺跡として登録されている古墳群は一つの遺跡として扱った。なお、新潟平野の遺跡分布の悉皆的検討には、寺崎裕助 [2002] の先駆的な研究があり、最近では水澤幸一が古環境の変遷とリンクさせた検討を行っている [水澤2015]。
- (3) オープンソースのフリーソフトウェアであるQGIS (ver.2.8) を利用する。ベースマップは、国土地理院が提供する基盤地図情報数値標高モデルから作成した新潟平野の10mメッシュのDEMである。これをQGIS上に表示し、そこに遺跡の位置情報(緯度・経度)を入力したデータベースを読み込んでドットで表示した。分布密度の描出にはQGISの「ヒートマップ」モジュールを利用した。
- (4) 分布密度の分析は考古学の分布論と相性が良いため、時代・地域を超えて多くの実践例があるが [吉田・増田・山口2006、藤尾2006、難波2006、増田2011、石井2014など]、こうした点に留意したものは少ない。
- (5) 同書の註に「1990年、川村浩司・田中靖の指摘による」とある [金子1991: 96頁]。実物はみつけ伝承館に展示されている。
- (6) 分析に際しては、オープンソースGISのGRASSのr.losモジュールを用いた。可視範囲は、寺村 [2014] が昼間の人の視程(晴天時15km、並雨時6km)の平均として採用した値に倣い、対象とする古墳から半径10kmとした。
- (7) 2016年度の新潟市文化財センターの企画展「北区の古墳時代」を担当された相田泰臣氏の研究成果による。
- (8) 前稿 [小野本2015] は古墳編年を主旨とした研究会の発表資料であったことなどから地域区分の方法などに本稿と異なる部分があるが、論旨に差異はない。

引用文献

- 相田泰臣 2015「越後の古墳と潟湖」『海の古墳を考える 5 日本海の潟湖と古墳の動態 北陸からの視点』 海の古墳を考える会
- 阿部朝衛 1989「新潟県阿賀野川以北の古墳時代前期」『北越考古学』 2
- 甘粕 健 1986「古墳文化の形成」『新潟県史』 通史編 1
- 甘粕 健 1993a「越後地方の前期の古墳」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
- 甘粕 健 1993b「古墳文化形成過程の新潟平野と会津盆地」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』
- 甘粕 健 1994「越後」近藤義郎編『前方後円墳集成』 東北・関東編 山川出版社
- 石井淳平 2014「北海道南部における擦文文化期の遺跡分布とその変遷—「中世的蝦夷地」の成立—」『北方島文化研究』 11
- 大熊 孝 1979「信濃川治水の歴史」『アーバンクボタ』 17 久保田鉄工株式会社
- 小野 昭ほか 1991「長岡市麻生田古墳群測量調査報告」『長岡市史研究』 2 長岡市史編纂室
- 小野本敦 2015「新潟県の古墳編年」『地域編年から考える一部分から全体へ—』 東北・関東前方後円墳研究会
- 春日真実 2002「古代古志郡の考古学的検討」『新潟考古学談話会会報』 24
- 金子拓男 1991「古墳時代の遺構について」『山崎A遺跡発掘調査報告書』 見附市教育委員会
- 川村浩司 1992「山頂側に存在する墳丘外広域平坦面」『古津八幡山古墳 I』 新津市教育委員会
- 川村浩司 2000「信濃川右岸の古墳群」『季刊考古学』 71 雄山閣出版
- 坂井秀弥 1989「原始・古代の歴史的環境」『山三賀Ⅱ遺跡』 新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 滝沢規朗 2009「県内における高地性集落・環濠集落」『山元遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規朗 2014「続縄文土器と土師器の共伴事例からみた並行関係—越後の事例を中心に—」『古墳築造周縁域における古墳時代前・中期の社会と地域間関係』 東北・関東前方後円墳研究会
- 津村宏臣 2006「縄文文化要素の傾向面分析と時系列動態—時空間補間(内挿)による文化要素の生態的特性の評価—」『実践考古学GIS』 宇野隆夫編 NTT出版
- 鶴巻康志 1993「越後における前期古墳の概要」『東日本における古墳出現過程の再検討』
- 寺崎裕助 2002「新潟平野の遺跡」『新潟考古学談話会会報』 24
- 寺村裕史 2014『景観考古学の方法と実践』 同成社
- 難波純子 2006「南周青銅葬器の広がり」『実践考古学GIS』 宇野隆夫編 NTT出版
- 新潟市教育委員会 2012『四十石遺跡第2次調査』
- 新潟市教育委員会 2014『史跡 古津八幡山遺跡発掘調査報告書—第15・16・17・18・19次調査—』
- 新潟大学考古学研究室 1989『保内三王山古墳群』 三条市教育委員会
- 新津市教育委員会 1995『舟戸遺跡発掘調査報告書』
- 日本考古学協会新潟大会実行委員会 1993『東日本における古墳出現過程の再検討』
- 橋本博文 2015「牡丹山諏訪神社古墳調査の総括」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』 15
- 広井 造 1996「新潟平野南部における古墳時代開始期の一考察」『考古学と遺跡の保護』 甘粕健先生退官記念論集刊

行会

- 広井 造 1999「古墳の墳丘と立地」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 広井 造 2005「越後古墳時代の動向」『古代の越後と佐渡』高志書院
- 藤尾慎一郎 2006「弥生時代遺跡GISデータベースの構築と分析」『実践考古学GIS』宇野隆夫編 NTT出版
- 藤根 久・米田恭子 2015「埴輪の胎土材料」『新潟大学考古学研究室調査研究報告』15
- 巻町教育委員会 2002『南赤坂遺跡—縄文時代前期～中期・古墳時代前期を主とする集落跡の調査—』
- 増田浩太 2011「山陰地域における土器製塩と塩の流通—GIS解析を中心として」『古代出雲の多面的交流の研究』島根県教育庁古代文化センター
- 水澤幸一 2015「蒲原平野の遺跡分布からみた潟と河川」『日本海沿岸の潟湖における景観と生業の変遷の研究』島根県古代文化センター
- 水澤幸一ほか 2016『城の山古墳発掘調査報告書』胎内市教育委員会
- 吉田 広・増田浩太・山口欧志 2006「弥生銅鐸の分布とその意味」『実践考古学GIS』宇野隆夫編 NTT出版
- 若狭 徹 2013「群馬県の大形円墳の動向と古津八幡山古墳」『シンポジウム蒲原平野の王墓古津八幡山古墳を考える—1600年の時を超えて—記録集』新潟市文化財センター